



昭和 47 年 (1972 年)
6 月号 (No. 324)
社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

目次

本文	
秩父宮妃殿下のおことば	1
しない支部	藤島 玄 1
山と蝶のものがたり①	
	春田俊郎 2
朝日連峰ブナ林	
その後	村井米子 2
アンナプルナ I 偵察	塚本茂樹 4
青森県岳連指導員	
研修会に参加して	松永敏郎 5
富山支部総会出席報告	吉沢一郎 5
会員通信	
山便り	小林智明 2
君知るや南の涯	荒尾 宏 3
武田先生健在なり	5
コペンハーゲンへの宿	植村直己 5
図書紹介	
われらのものならぬ世界	
	近藤信行 6
会務報告	
昭和 47 年度通常会員総会	7
三田会長あいさつ	7
昭和 46, 47 年度事業報告	7
4 月支部長会議	8
4, 5 月理事評議員会	8
ルーム日誌	9
新入会員, 住所・住居表示変更	10
昭和 46, 47 年度収支決算(予算)表	11
その他	
UIAA の規約 (完)	3
JAC 石川支部隊 (ヒマラヤ)	3
図書受入報告	6
春の叙職	9

秩父宮妃殿下のおことば

秩父宮記念学術賞の第八回授賞式が、本日学術振興会により挙行され、今年は松方三郎氏を隊長とする三十九名の隊員による「一九七〇年エベレスト隊の業績」に対して授賞されましたことは、私の心からのよこごびでございます。

世界の最高峰エベレストのそびゆる限り、いつの日か我が国も一度は登頂するという夢は、故宮様をはじめ、山に関心のある人々の長年にわたるひとしき願ひであったと思います。それが時期到来して周到な計画のもとに立派に成し遂げられ、三人の隊員が登頂に成功また人跡未踏の南壁の八千 m の高所までいどむなど登山活動の面はもとより学術調査活動の面においても登頂を助けつつ困難な環境のもとに高所医学部門、地球物理学部門、気象部門において得がたい業績をあげられ、貴重なデータを得て、学術上に大きな貢献をされたことに對し、心からの敬意を表わすものであります。

これひとえに隊員各自の不屈の精神と体力に相まって、冷静な英知、そして相互に支えあった協力の賜のものであると、あらためてその労を多とするものでございます。

終わりに今後の健康と精進を祈って祝詞とします。

昭和四十七年三月三日

しない支部

藤島 玄

題名の「しない支部」は、越後や山形支部のように国名・県名を冠称した支部名ではない。正称登録済みの越後支部の実質的な私称である。

昭和二十一年創立以来、見るべき事業らしいものは何もしていない。毎年の会員総会の報告は、何もしていません。つづいて、山行、講演、映画の主催一切なし、

十周年、二十周年記念事業など挙行すれば、必ず報告書は出版する。出版については、会員がやったことを記述すればよい。出すのは支部長の責任である。近年のものとしては、『越山岳』第六号(越後国境踏査報告書五三八頁)がある。遭難対策はなし。自然保護はなし。海外遠征はおろか、支部の基金、共同装備も何もなし。会員の指導、命令などもっての外である。したがって、役員会も月例会もない。年一回支部総会を山野で開催で総てが終る。しない支部である。

会員は四月末現在で二百九名。前年度未納者二十七名。本年度納入者二十九名でトントンというところ。本年度支部会員名簿を出す時点で四名が自然退会となり、本年度中には十名の新人会者を見越している。

支部に金がない。事業をしない。命令もしない。あつては、青筋たてて喧嘩をしてみようもない。そうなる。本部の会費値上げの事情は、説明によってよく判ても抵抗を感じる。入会金値上げで万単位サンセイ。既得権のある会員年会費値上げフンサイである。というのは、こちらの事情による。本部から支部への還元金(会費徴集手数料)が二百円で結構。それより、支部年会費五百円も、本部の値上げ理由がどうあれ、それに便乗の気持は毛頭ない。むしろ郵便振替の「払込料金加入者負担」の丸押しを、せめて J・A・C 略章の無料進呈を考えている。というのは、支部費五〇〇円×二百名は十万円になる。このうち三分の一は通信費、三分の二は支部長の自由裁量(交通費、会場費、旅費、慶弔費、果山岳協会分担金、その他)となつていく。会計決算報告は五分以内で済む。つまり、ゼロであればよく、貯金もなければ、借金もない。

しない支部と越後支部のそもそもの成り立ちが、ほか様と違う。その組織形態や目的について詳述しないが、求められればどの件について説明の用意はある。一番簡単に知るには、送料添付で「越後支部会員名簿」を請求されることである。

要は、越後支部はしない支部としてどう運営していくかである。良いか悪いかの評は甘受するが、年々会員が増している事実を凝視していただきたい。役所の補助を求めたことはないし、営利会社社に援助を乞うたこともない。第一そうしたことには、嫌いであつて性に合わない。下手糞である。会員の一人一人が支部の力である。

会員の一人一人が大事である。最初から意識的に通してきたが、職人・役人・商人・社員・先生何んでも結構だが、大学山岳部 O・B は委員に敬遠した。現世代に通用しないシステムだが後進越後国には有難い、一校一派にこだわらずに済む。みんな仲よく一緒に飲む、よほどのことでも一晩考えて、悪ければさっさとあやまる。良ければそれに乗っていく。無理強い決してしない。するのがある。遭難事故は面目にかけてもするな、くらいである。

支部は、県下と全国の会員の社交機関。みんなが寝食をともにして、和気あひあひの裡に切実琢磨すること、会費を催促前に納入するのが、いい会員だ、と口癖のように私はいう。

支部長としての本部へ要望は、支部の育成である。高所から支部のあり方について巨視的に再編成を考えてほしい。今どき、一県単位三十くらいにウロチョロしているのがおかしい。少くとも五十、できれば三桁を単位とした。少数精鋭も結構だが、会議に大声を上げるだけの能であるまい。組織体は、組織数が物をいう。お互い脚下照

覽、倍增運動も必要であらう。

次に、本部の会員サービスである。私は物は欲しがりません。「山岳」も『山』も結構満足である。そんな技業派生的の物より、J・A・Cのクラブの意味を周知してほしい。これは今始まったことでない。歴代会長以下聞き流すのみで文章で答えようとしなさい。会則を読みなさい、で事は済まない。私の不勉強もあるが、外国の生活もなければ文章も読めない。イギリスに発生したらしいそれを真似したらしいクラブの発生、経過、現在、その歴史的エピソードなど、J・A・Cはそれと並行するの交叉するの、その態度

明治三十三年(一九〇〇)の四月を迎えると、東京府立一中(當時は東京尋常中学といった)では、武田久吉が五年となり、四年には内田清之助、村松茂がおり、さらに一級下の三年には、市河三喜、梅沢親光、小龍惲、鳥山悌成、佐武正一らが在籍していた。また弱冠の二年生ではあったが、河田黙、茂の弟の村松操も同じ学校の生徒であった。

この生徒たちは、当時、理科の教師として熱心に指導に当たっていた帰山信順を敬慕し、その影響を受けてみな動植物に興味をもち、今でいうクラブ活動の形で、校内に同好会が形造られていた。帰山信順は明治二十六年四月に同校の教諭となり、儒教道徳を中心とする講義教育の行われていた中学にあって、全く理科的な魅力ある授業を行っていた。理科の時間には講義はほとんど行わずに実習、実験を通して、身をもつて自然を理解させる方法で、またよく野外に生徒を連れ出して、動植物の採集や観察を行わせた。明治三十一年の秋当時の五年生が伊香保に修学旅行に行った折には、生徒を動物、植

度を決めて『山岳』『山』に連載するくらい意気込みで発表してもらいたい。クラブの説明があれば(但し、副会長以上の責任者)それを中心にして、私なりのブロンズを廻して、新しい息吹きをもつて、山へ志向させるのが支部長の責任でもある。気長に待たねばならないならば、こちらも気長に待っている。どうせ山では、天候の変るのを気長に待つのに慣れている越後支部会員ではある。つまり、支部は無色透明な登山趣味者の、誇り高き事務機関と割り切っている。そこに融和と協力の社交機関が成り立つわけである。内部紛争は起きたこともなければ、起き

物、鉱物の三班に分けて、自然に対する興味を助長させながら詳細に指導した。帰山の教え子の中には前記の生徒のほか動物狂、植物マニアが多数あらわれ、卒業後も帰山の周囲に集まっていた。とくに明治三十二年に卒業した朝比奈泰彦、明治三十一年に卒業する筈であった(途中で転校)三宅恒方はそれぞれ植物と動物の旗頭であった。帰山を中心集った府立一中の生徒

山と蝶のものがたり

日本博物学同志会

1

春田俊郎

そうもない。後継者育成も支部長の責任である。会費を徴集するだけが能ではない。裏方、舞台廻しが職務でもある。会員誰とでも飲む。飲んでは語る。しかし唄うのと、争うのは御免、気が弱くてとでもできないことを支部会員はみんな知っている。玄さん結構、先生またよろし。それでもコースを外さず、リズムをもつて歩いて行くよう努めている。



の発足を見るわけである。中学生を中心とする未熟な会ではあったが、帰山という優れた指導者のもとで、OBの朝比奈三宅が顧問格として加わり、日清戦争後の国力伸張に乗って夢の多い会であった。また城数馬の主催する山草会、矢沢米三郎の主催する信濃博物学会がいずれも明治三十五年に生まれいるから、「日本博物学同志会」はこれに先立つこと二年という先駆的な

存在でもあった。

「日本博物学同志会」は「博物の友」という機関誌をもち、明治三十四年の第一年度には六冊、三十五年の第二年度には九冊、三十六年には四冊、三十七年には四冊、三十八年には六冊と、日本山岳会が発足して「山岳」が発刊されるまでに、計二十九冊を発行している。

昆虫や植物の採集を続けていると、

朝日連峰ブナ林のその後

村井米子

かねて警視朝日国立公園の朝日連峰ブナ林が、甚しく皆伐され、なおも森林限界に及ぶまで伐り進まれている現状、殊に動物の生態にも、住民の保安のために肝要な寒河江菅林管内の伐採中止要望運動を起こすとともに、J・A・Cルームにおいても署名運動をすすめている。

同時に日本自然保護協会よりも各方面に要望書を提出したが、去る一月末秋田管林局計画課長より、同協会に対して具体的な今後の方針の回答が寄せ

より新しい種類、さらに珍しい種類を求めて平地や海岸の種類ではあきたらす、足は次第に山へ向って伸びていく。博物学同志会の若者たちも、東京附近から高尾山へ、高尾山から奥多摩へ、奥多摩から丹沢へ、さらに日光、赤城、浅間と次第に採集活動の範囲が広がり、だんだん深山幽谷を指向するようになってきたのは当然である。会員の中で、武田久吉は明治二十九年に既に日光の中禅寺、湯本を歩いているし、中学三年生の明治三十一年には、日光の大真名子、小真名子、太郎山に登って植物採集に懸命であり、明治三十三、三十四、三十五年も連続して日光を訪れ、登山と採集に従事していた。

村松茂は生活があまり豊かでなく苦学していたが、給仕などのアルバイトをしなが、明治三十四年、三十五年の二回にわたって、榛名山を訪れ、もっぱら蝶の採集に精を出している。河田黙は当時訪れる人も少なかった金峯山に明治三十五年に単身で登り、多数の植物を採集している。

(文中敬称略)

山仲間……実状を見られた会員の皆さんも、監督の眼を働かせて下さるようお願いし御報告を申上げる。

山便り

小林智明

秋田の泥湯より高松岳、山伏岳に登り、それから鬼首に出ました。山の湯の夜明にきこゆ鶯のさやけき声にけさははるるか

五月四日

(伊倉宛)

1971年のヒマラヤ

B・ポストモンスーン

東部ヒンズ

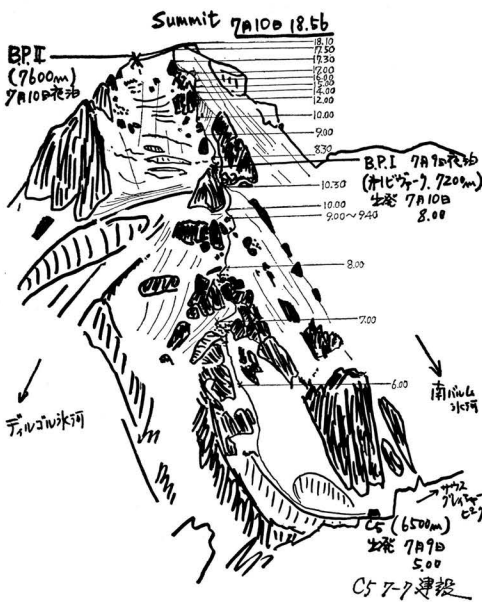
(続)

日本山岳会 石川支部隊

ティリッチ・
ミール新登頂

隊員、増江俊三(隊長
38)、石田健(副隊
長、39)、津田文夫
(33)、沢村真治(31)、田中嘉明(27)
山岸幸寛(26)、宮波正行(24)、若宮
昇(24)、岡本明男(23)、中川清人
(22)、調査隊、長田和己(39)、鈴木
尚(27)、西公一郎(30)、中野卓夫
(23)——この方は主としてディール
・ゴルのゴシヤネル氷河にて活動し
た。

登山活動、ラワルピンディ全員集結
(526)、同発(530)、チトラル(ロ
ワライ峠経由 622)、同発(655)、

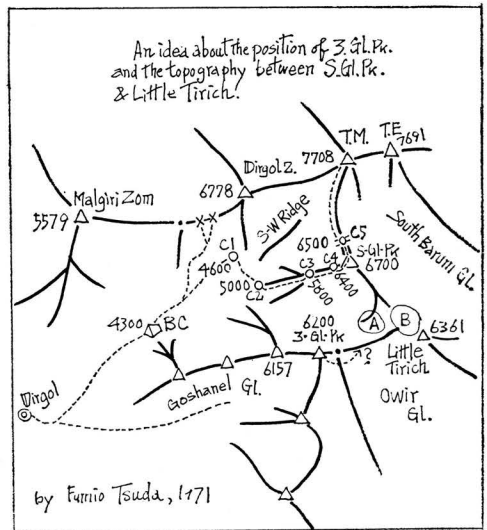


C4 (6300m) より観察したC5頂上

アルカリ(67)、BC(四三〇〇m、
610)、ルート偵察(611)15)、デ
イル・ゴル峰左手のゴル(612)、
そのまた左のゴル(614、五五〇〇
m)、南西峻は危険と判断してSG
P(南水河峰)経由に変更(615)、
C1(四六〇〇m、617)、C2(五
〇〇〇m、SGPよりの西稜支稜の
下、619)、C3(五八〇〇m、細い
雪渓を登りつめたところ、622)、
C4(六三〇〇m、SGPの手前
71)、C5(六五〇〇m、SGPを
越えたコルの上、77)、南面を登
る、BPI(ビバーク点、七二〇〇
m、79)、登頂(沢村、岡本、一八
時五六、710)、BPI(七六〇〇m
同日)、B地点で動物の白骨発見、
711)、下降中50m滑落、クレバスで
助かる、C5着(三三時、711)、B
C(714)15)、チトラル着(716)。

3 Glacier Peak の位置について
下図は津田文夫氏がC4にいた時、
じっくりと周辺の山々を観測した結果

できあがった
ものであって
従来われわれ
が使われても
なかったイ
エリッ・ヴァ
ラの地図とは
少しばかり違
うので注意し
て頂きたい。
但し津田氏の
3GPの位置
は、少し西へ
行き過ぎとい
やしないかと
言っている人
もある。
ヴァラの地
図ではNo.5
がこれに当るが、津田氏によるとこ
にはピークが存在していないのであ
る。以下津田氏の解説。



六九二〇メートル峰 東部ヒンズ・クシュ の未踏の最高峰陥落す

ワハーン側のウルグンテ・パラ谷
の奥にあり、イェジー・ヴァラの地図
では二六五号となっている六九二〇m
峰が遂にイタリア隊によっておとされ
た。最初はスペイン隊が五名で試みた
が、六七五〇mまで達して悪天のため
退却、隊員一名がクレバスに落ちて死
亡した。

そのあと引き続きトリエステのトスカ
ン隊が攻撃し、シヨゴールドックとシ
ャヨーズ峰の間に最終キャンプを設
置まずシャヨーズに登り、西側につ
てから六九二〇m峰に立った。(一九七
一年八月八日、W・ローマンノ及びL
・コルシ)

スペイン隊はこれにシャン峰という
山名を興えたが、これは不適当だとい
う。なお、ゼバック山群がポーランド
隊によってかなり探られたが、これも
盲点の一つであった。

UIAA の規約

八、その他

第一八項

UIAAの経費は
会長並びに事務局
の勘定から支出さ
れるが、そのものは会員からの会
費である。会費は毎年、四月三〇日
までに払込まなければならない。

第一九項

脱会者は八月一日以前に書留郵便で
申出ること、その年の会費は全額
負担すること。

第二〇項

この規定の第一七項Cによって解
散が決定された場合には、UIAA
Aの資産は売却され、債務支払い
後の売上取得金は、前年二月三
一日現在における連盟会員の数に
応じて配分される。

第二一項

a、議事用語(Verhandlungssprache)には、フランス語、英語、
イタリア語、ドイツ語が使われる。
b、この規定の例外的な説明
(abweichende Auslegung)に
おいては普通、フランス語の文章
が使われる。

第二二項

この規定は、以前のものに代り、
一九六四年六月二〇日より効力を
発する。
フランス語の原文からドイツ語へ
の翻訳は、一九六五年二月一日
に行なわれた。

以上五回に亘りUIAAの規約を一
応ご紹介したが、今までやった事業な
どについてはいずれ稿を改めてご紹介
したいと思っている。

(本頁吉沢一郎氏執筆)



藤江幾太郎氏画

●●君知るや

南の涯●●●

九州 荒尾 宏

五月がやってくる私の心はうきうきする。アルプスの氷壁にも勝る仙境が内地の数山の中にあるからだ。

第一回踏査は昭和三十八年。特別天然記念物アイラトビカヅラ (Muond Sempervirens) と同種であるか異種であるかを確かめるために行なった。折しも別府水害の時で、海拔四〇〇mばかりの轟峠を越える道は、所々方々崖くづれを起して命がけの遠乗りであった。

第二回踏査は昭和四十年。その花房を収め、自生地を踏査するためであった。単独五〇〇Cのバイクを使って九州本島を阿蘇山の辺で横断して、延岡に下って、宮崎県側から、三八〇mほどの焼尾峠を越えてはいった。これまた二日続きの豪雨の中を、全身ずぶぬれとなり、大きい角パラスの坂道は、エンジンでローに入れて押しかせいでしょと登った。

第三回踏査は八ミリ撮影が目的で海路蒲江町からは入ってみたが、また雨に降られ、撮影も何も出来なかった。(昭和四十二年)

第四回踏査は昭和四十三年、友人と二人で二五〇Cのバイクに二人乗してはいる予定であったが、どしゃ降りの豪雨のために、友人は一人で先行し私はバスで行くことにした。友人はずぶぬれとなり、財布の中の札を一枚一枚炭火で乾かさねばならなかった。私はまた峠の峻路の崖くづれによって行く手をふさいだ杉の木を、運転手と車掌と三人がかりでやっこと引き除きバスを運んで進んだものだった。

かくいう仙境とは大分県の南端、宮崎県と接する、蒲江町丸尾の葛原部落のことである。北は峻険なる山高く道はなく、東西の峠道と南の海路がけわしく行く人をさまたげている。このように地形が南に開けているので、南国特有の晴々しい陽光に恵まれて暖かく、雨はこのように多いので、これから説明するような豆科植物の華麗な大物が自生するに至ったのであろう。

第一回目に民宿した豪壮な家は汀に積上げた石がきの上にあって、庭の前面から、四〇〇年以上も経ったと思われるクロマツの巨幹が、枝を張って太平洋の上にさし出していた。その後訪問するたびに、年々海岸は埋立てられ、真珠の養殖小屋が立ちならび、海をおおって養殖筏が連ねられるに至った。自生地への道は海岸沿いに西へ進むのであるが、シャリンバイの白い花の自生が美しく、オオイワヒトデ、コバノイシカガマ、サカキカヅラ、ハマナマメ等の暖地生ものの繁りを觀賞しながら次第に登り坂になって、弓張峠という海拔一二〇mほどの絶壁の上を通る。

絶壁の裾は太平洋の荒浪に洗われ、きつ立つ断崖が八〇m、一二〇mと

この植物の蔓延するつるに蔽われている。峠を廻ると山の西面に出るがここは自生がなく、眼下に湾入した白い砂浜が見渡せられ、葛原の部落が奥の方まではいっている。この湾には日本一大きいハマグリが産し古来有名だと聞く。部落の裏に続く急傾斜の雑木林の山が標高一〇〇mばかり上ったところからこの植物のはびこる仙境がくさくさしているのである。

まず、現地に行くには一軒の農家の主屋と小屋の間のせどを通るより他ない。挨拶もしないで山にはいるという事は出来ない。私ははじめて訪問してバイクを預けたのであるが、暖いお茶など供せられ、しみじみ日本の田舎の人々のよさというものを考えた。道は全くの踏分け道で、ごくわづかの入りの山道に過ぎない。この道筋にキガソビの野生を見、シノソウの自生、ユキバヤザサの自生があるから面白い。海拔八〇mばかり登って炭焼窯の前を通り杉の三〇年生ばかりの植林を通るといよいよカマエカヅラ(蒲江蔓)の布生する地帯にはいる。これは馬毛島に自生する *Muond ikenda* の変種として *Kamaensis* の変種名をあたえられ、カマエカヅラの日本名を用意せられたものである。豆科植物の大型の蔓性であるから、叢林を圧し、花房は下の方に垂れるので遠望した際は、わずかに新芽の褐色が、アラガシ等の濃緑色と見分けられる程度。

ここまで来るとその蔓延の葉の下にえみえみ華麗な紅色の花房が豪華にぶら下っているのに驚く。一花は三花づつ集って花枝に着き花穂は何百という花をつけているので三十五cm乃至四十五cmのかざり提灯のように美しい。アイラトビカヅラの意色は紫黒色にも見えむしる悪臭と共に妖えんな姐御を思わせるが、この花はもえぎ色の萼が、おわん形の茶褐色の苞におさま

り、苞には金色の剛毛が光るので、全く今らんじゅくした舞姫の華麗さである。しかも左右二枚の翼べんが向い合っていて、広いすき間を残し、中は吹き流しになっているので愛嬌がある。中央に左右からしかり合掌して先端がトビ先のように曲って尖った竜骨べんはアイラトビカヅラ同様、聞くことはないので、中に収まった一束のおしべは完熟しながらもめしべを中心に堅く束になっている。この辺にこの花の結実しないナゾが秘められているのではなからうか。

蔓は人の腕程もあり、十五mばかりの懸崖を一気によじ登り、何百という花房をつけているので壮観である。それに添って岩壁を落下する滝水は径六mばかりの滝壺に波を起し波は周辺の岩骨にだけているが、あまり急流な

不法ではないわれわれの立場

— アンナプルナI 偵察 —

1972

信濃支部長 塚本茂樹

去る三月十二日付(東京版十一日)の毎日新聞に「ヒマラヤ不法偵察云々」と、大きなそしてセンセーショナルな見出しで、信濃支部の奥原隊長以下四名のパーティーがネパール政府の「登山規則」を無視したまま「もぐり登山」に出発した、と報ぜられました。このことについて事実を述べたいと存じます。

まず奥原隊長は毎日新聞に書かれていような不法なこととはしておりません。奥原隊長は不法なことをするような人格の者ではないことを信じながらも、私は念のために友人の石井氏に手紙と記事の切り抜きを托してネパールへ飛んでもらいました。石井氏には奥原隊長に手紙を渡して返事を持ち帰る

ために小魚さ上っていない。岩壁の途中に白ふのあざやかなマツザカシダの一葉が薄しぶきの風にヒラヒラと動いている。

この谷を中心に西に一ツ、東に二ツばかりの谷筋がこの植物の自生地であるが、全面積は一町歩に余るであろう。だからお金のある人が、小祠を設け、観世音ほまつをまつて、堂守の一人をおいたならば、永久にこの仙境は守られるであらうが、このまま人跡の繁くなるにまかせたならば必ず荒廃し、この見事な大蔓も心なき徒輩に切断せられてしまふだろう。日本国中、ただ一カ所の自生地であるこの仙境を紹介して、この仙境が永久に保存されるよう一日も早く良策が立てられることを願う次第である。

ことと、ネパールにおいて事実を調査して来てくれるよう依頼しました。三月十三日夕方羽田を飛びたった石井氏は十六日午後カトマンズを離れるまでの間精力的に行動し、日本大使館、ネパール政府、奥原隊長に協力してくれたランジャン・パチャリヤ氏をその他多くの人に会って実情を調査し、奥原隊長は何ら不法なこととはしていないという報告をもたらしてくれました。ポカラでは奥原隊長が既に出発した後だったのでメール・ランナーを走らせております。

一方奥原隊長からの通信によれば前出のランジャン氏が関係官庁に同行してくるなど大変協力してくれたようです。ネパール政府の担当官カレル氏

武田先生健在なり

年をとるとだんだん無精になり絶対必要でないじょう外出はおことわりという次第。なにとぞ悪しからず。

長寿につきものの老化の現象、これさえなければ長寿も悪くはありませんが、さりとて川端某のまねをするほどの愚もできません。ただいまのところ往年の山行をかみしめるだけです。

右来状は、武田久吉氏より本会集会係宛寄せられたものです。
(編者)

青森県岳連指導員

研修会に参加して

松永 敏郎

「青森の春は遅いが、桃や桜の花が一時に咲いてくれます」。当会員で理事長の中野さんが話してくれた通り、新緑のようやうが始まった中に多彩ないろどりが車窓を過ぎる。梨の白い花も豊富である。

酸ヶ湯からのロープウェイをおりると、強い風の中にスキーヤーが多い。他のスキー場の寒雪で、八甲田の山は例年よりもにぎわっている由である。五月三日、赤倉沢のBCに集合。四日は、朝から終日、滑落停止・ザイル操作、特に確保に力を入れて研修。この二月に参加した秋田岳連の研修会の折も感じたが、研修者の技術への関心は非常に高く、鋭い質問が出る。難をいえば、より本筋を体で覚えることが大切であり応用技術を自分で作り出す意欲も持っていると思うことだ。五日は早朝から雨、テント内で背中をまるめての研修である。午後、赤倉

沢をくだって八甲田温泉にひたる。

雪中行軍中の悲惨な大量遭難で有名な青森第五聯隊の捜索時の写真が十数葉、とりわけ二名の生存兵士の、凍傷で切断された両手両足部の写真は、いまさらながら背筋をさむさむとさせ、残った軀と命をどのようにして過し果てられたかと思う。

最近になって行われた同一ルートでの自衛隊雪中行軍は、雪も少く、事前には大量に取りつけた標識を伝い、後尾には雪上車に従え、上空からはヘリコプターの援護をうけ、まったく無事に終了したというのを聴く。大峠の上、高い丘の上に立って、雨に濡れる当時の兵士の像を見上げ、その足に履いた蹠靴をみるにつけても、七十年の歳月の正に隔世の感を持ったものである。「新しい事柄を知りたい」とよく聞かれる。しかし、それだけが必ずしも優れたものとは私は思わない。いずれにせよ、秋田、青森でお会いした人達のもつ山への姿勢にも、べんべんたるおのれを戒めるもの大いにあった。

コペンハーゲンの宿

植村 直己

急いで当地にまいりましたものの、許可待ちで足もどくっています。五月中、下旬にはグリーンランドに入れますが、一年間はエスキモー人を相手のグリーンランド生活を余儀なくされることでしょう。かれらを相手にじっくりとおちついて生活を共にし、その中から訓練をしていくのが最善の策と考えます。

事務局に佐々木さんがいなくなるのはさびしい気がします。次はエスキモー部落から便りを差し上げたいと存じます。

四月二十八日

(藤田宛)

富山支部総会出席報告

吉沢 一郎

ヒラリー卿夫妻の件でえらいお世話になってからも二年、私にとっては懐しい、また久振りの富山であった。来るについては例の国鉄ストにひっかかってひどい目にあつたが、石坂久忠君御一家の温かいおもてなしや、村山汀子さんの可愛いお嫁さん姿をみて、疲れも何もスツとんでしまった。

一方、立山や剣や薬師はまだ真白に見えたのに、支部の皆さんの顔は相変わらず真黒、流石だなとつくづく羨やましく思った次第である。

一九七二年度の総会は四月三十日午後三時から富山市安養坊倉ヶ谷(早く言えば呉羽山)にある日本山岳会富山荘で和やかに開かれた。中田支部長が司会者で、若林委員長が説明役。

まずこの一年間に物故された木津誠一前支部長と河内清氏に対し黙悼を捧げる。それから臨時参入りの私が公式に出席したということ、登山界の内外情勢について一席弁する。

議事は型通りで七一年度の行事と決算の報告、役員の改選は案通りに承認された。支部長は任期満了。

委員 若林啓之助(委員長、野島福三郎、石坂久忠、山崎秀雄、浜田二、青木昭三、木戸繁良、中橋右近、深井三郎、監事 藤平彬文、久保健一(以上敬称略、会員番号順)

経費の不足は支部長と委員長がうめてしまふので極めて簡単である。

次は七二年年度の行事予定と予算が承認された。五時総会は目度終了。この呉羽山には宿が一軒ある。総会の始まる前に会員諸氏が腕を振って掘って来た生きのいい笛を中田さんの奥さん

及び後任のバニイ氏によれば「登頂さえしなければいくら街道をはずれてもかまわない。トレッキングの許可で何処まで行ってもよい。皆さんの場合も当然それでよい」とのこと、九日午後トレッキングの許可をもらい、十日にカトマンズを出発しています。

十六日夕方メル・ランナーから手紙を受け取った奥原隊長は非常におどろいて、隊のシエル・ダワをカトマンズへ走らせ日本大使館の高山氏及びランジヤン氏に關係官庁を確認してもらい、その返事が来るまでレテの少し手前のキャンプ地に滞在すると言つて来ております。

シエル・ダワは三月二十三日夕方高山氏とランジヤン氏の返事を持って戻っております。奥原隊長は「高山氏、ランジヤン氏からの返事で一切OK、GOです。ネパール政府では最初の通し登頂さえしなければ六〇〇〇m位まで行ってもトレッキングでよろしい。改めてイメージレーション・オフィスに確認してからの返事です。ここで改めて不法偵察でなかったことをご諒解していただけたことと思います」と書いてよこしました。

ピナヤ記者には、カトマンズでかな

と田中美和子さんのお二人で味つけ宜しくグツグツと煮て下さった。これがお弁当やお酒のつまみ兼おかずになった。話題の中心は土地柄から立山や剣の話になるが、下界での雑事もまた愉しく語られていた。かくしてお開きは暗くなる少し前であった。

× × ×
総会の進行中、準備中、そのあとなどで決まったことや希望事項などを記しておこう。まず新年度からは支部の事務所が中田さんの自宅に移る。

〒九三〇、富山市東田地方町一六―二七、中田勇吉方、電話、〇七六四

りしつこくつきまとわれたようです。「他人に言うな」などと言ったつもりは全くないのですが「来年は登りたいが今年は登らない。見てくるだけだが出来れば六〇〇〇m位まで行ってみよう。このことはネパールが東京かどこの新聞に出るか」「日本だけだ」というような会話があって、その時の話の行き違ひだろうかと言つて来ております。この時もカレル氏及びバニイ氏の前記の言葉があったので、このようなことをピナヤ記者に語ったとのこと

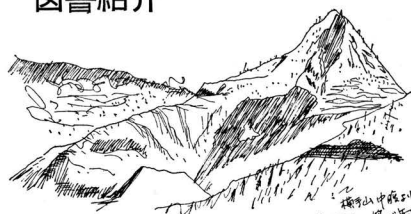
いずれにしても奥原隊長以下四名のパーティは何ら不法なことをしておりませんし、ネパール政府の許可を得てその許可の範囲内で行動すべく日本を出発し、カトマンズで出発してあります。毎日新聞の記事は悪意か中傷か私にはよくわかりませんが、日本の代表的新聞があのような記事を掲載されたことはまことに遺憾です。

事実の概略を述べた皆様のご理解をいただきたいと存じます。今後のことでは多くの方々に心配をおかけし、激励もいただきまた大変お世話になりました。この場をかりて厚くお礼申し上げます。

―三三―三二二―
支部への還元金に関連して、会費の納入方法、本部支部会員の会費の差、支部費の一定化などが相変らず問題になる。根本的な解決方法を考える必要がある。

毎月第三土曜(一四―一七時)に山荘に集まる。当番は委員と監事が分担ということが決まった。これは長く続けて頂きたいと思う。
ノーマン・ハーディーの受入れについて迂余曲折があったが、こういうことは簡単に考えてはいけな

図書紹介



神崎忠男氏画

われらのものならぬ世界

R・T・デュ・モンセル著

桑原武夫訳
高田方一郎訳

ロベール・テズナ・デュ・モンセルについては、かつて桑原武夫氏の紹介文があり、氏の著作『回想の山々』(昭和19)に「グラン・シャルモの北面」が訳載されたが、このたび、本書の日本語訳が刊行されて、登山家としてのデュ・モンセルがその高貴な姿をわれわれのまえにあらわしてきた。山によせる愛情、はげしい登攀、著者の内面にちつかわれた豊かな精神性、それらは読者に感動をよびおこさずにはおかないのだ。自己を語ることにすくなかったデュ・モンセルであってみれば、本書は彼の登山事蹟の全貌をつたえるにはいたっていないが、その高貴な精神によって支えられた文章表現が著者その人をよくつたえてくれるのである。

本書はデュ・モンセルの山における青春の日々の証言である。原書(一九六五年、ガリマル書店)の裏表紙にある文章の一部が、そのまま著者の日本語版『はしがき』に使われているのだが、その言葉によると、一時代のスポーツ上の成果の報告ではなく、山のよびかけ、その美しさ、そしてあらゆる危険をまえにした『魂の状態』(un état d'âme)がここにうし出されているのである。

一九一四年夏、十六歳のときの『山の発見』、ジゴールその他のすぐれた友人との出会いからはじまって、グラン・シャルモーズ、メージュン、コルド・ブレイティエール、エイギーニュ・ヴェルト、エクラン、プラヴン・ピークなどモン・ブラン山塊を中心とした西部アルプスの登攀、さらに軍隊時代、敵味方の意識をこえて登ったドルーゼンフルー南壁までの著者の足跡が物語られる。デュ・モンセル自身、第二次大戦が『その醗酵期』であり、第二次大戦が『その終末』であったと書いているように、本書は両大戦間における、一人のアルピニストの真摯な魂の証言なのである。

私が登山家としての『高貴な姿』と書いたのは、これらの文章がたんなる登攀記録や報告とは本質的に異なっているところにある。未知なるものの発見によるこび、あるいはまた『アルピニストよ、お前の勝利はどこにあるのか?』『アルピニズムはなんの役に立つのか?』と自問自答するあたりは、デュ・モンセルの青春の所在を知らしめるものだが、たとえば友人ファレとにも挑んだコルド・ブレイティエール北壁登攀をおえたあと、彼はつぎのように書きしるしている。

『まさしく私たちは「初登攀」をやったのだ。皆は口々に質問を浴びせかけた。が、なにを答えればよいのだろうか? 私たちが生き抜いてきたことは言葉以上のものなのだ。ただ沈黙だけがその深さを測ることができる。山男の沈黙は、謙虚さよりもむしろ羞恥心からくるものだ。告白は公衆の面前で行なうものではない。』

十六歳のころから夢みていた英雄的行為が完成したわけだが、それは彼の内心からわいてくる自覚であった。つづけて、冒険は『ものなかつた』(dans les choses)行われるのではなく『私たちの内部において』(en nous)行われると書くが、登山行為そのものが、自己の発見につながってゆく精神の豊かさを読みとらずにはいられない。

彼はその後、ジゴール、ル・ベック、ギベール、ラングロワに親しい山仲間をブライトホルンのヤング尾根で失った。技術的にも精神的にも山への接し方を教えてくれた友人に言葉すくなくも深い感謝の念をささげている。またシャモニーの谷の自然を破壊させようとする大資本家、人民の声によって選出された公共団体などの仕業にたいして『あなたがこの殺戮に抗することができるか?』と語って、自然へのかぎりない愛惜と登山行為から生まれた大きな喜びを語り、山男の本質を説く。それはスキーヤーとの比較のなかでいきいきとした発言となる。あえて引用しておきたい。

『スキーヤーたち? 彼らは、いまや群衆にすぎない。……彼らが好むのは滑降だが、それも人気のない山中で、ただスキーのすべる音だけが新雪と静寂を破るというような滑降ではなく、

図書室便り (昭和47・4)

新刊図書受入報告

- 東京新聞社寄贈
 - (1) 佐藤達夫著『花の画集1』 昭和47
 - 山と溪谷社寄贈
 - (1) 日本山岳写真家団・徳久雄雄編『カラーアルプス博物誌』 昭和47
- 朝日新聞社寄贈
 - (1) 朝日新聞社編『探検と冒険4』 昭和47
- 東京電機大学部体育会山岳部寄贈
 - (1) 東京電機大学部2部体育会山岳部編『部報V』 昭和47
- 田辺主計氏寄贈
 - (1) 志賀重昂著『河及湖沼』 明治43
- 神谷恭氏寄贈
 - (1) 霧の旅会編『霧の旅』 木暮先生追悼 昭和19
- 藤島敏男氏寄贈
 - (1) 第一高等学校旅行部縦の会編『失いし山仲間』 昭和47
- 中村純二氏寄贈
 - (1) 第一高等学校旅行部縦の会編『失いし山仲間』 昭和47
- 脇田正二氏寄贈
 - (1) 脇田正二著『ある大学ワンダーフォーゲル部員の死』 昭和46
- 坂下心一氏寄贈
 - (1) 中尾佐助著『秘境ブータン』 昭和34
- 日本山岳会
 - (1) 日本山岳会編『山岳』 第62、63年
- 定期刊行物受入報告
 - (部報・会報類)
 - (1) 関西学院大学体育会山岳部『E D E L W E I N S T R』 No. 40 (1972)
 - (2) 日本ヒンズー・クシエ会議『H・K T ニュース』 No. 6 (47-4)
 - (3) 兵庫県山岳連盟『兵庫山岳』 No. 39 (47-4)
 - (4) 国立公園協会『国立公園』 No. 267, 268, 269 (72-2, 3, 4)
 - (5) 京都山岳会『京都山岳』 No. 564

(72-4)
(6) 東京野歩路会『山嶺』No. 503, 504 (47-3, 4)
(7) 低山を歩く会『低山』No. 82 (72-4)
(8) 日本山岳協会『登山月報』No. 36, 37 (47-3, 4)
(9) 横浜山岳会『山』No. 477, 478 (72-3, 4)
(10) 山協『山と雪』No. 168 (47-4)

【雑誌】
(1) 『アルプ』No. 170 (72-4)
(2) 『岳人』No. 299 (72-5)
(3) 『山と溪谷』No. 404 (72-5)
(4) 『創文』No. 107 (72-4)

【その他】
(1) 大阪府山岳連盟ネパールヒマラヤ登山隊『カンジロビヒール登山報告』
(2) 山岳巡礼倶楽部『GAMS』[71]
(4) 世界の動き社『世界の動き』(No. 252, 253)
(4) 山と人の会『雲わらわ』No. 5
(5) 新潟県山岳協会『越後』No. 6
(6) 旧第一銀行山岳会『山岳会報』No. 11
(7) 日本アンデス会議『アンデス』における日本登山隊の記録 1952-1972
(8) アキアアルパインクラブ『アキタ・アルパイン』No. 5
(9) 北里大学ヒマラヤ登山隊『カンジロビヒール登山計画書-1973』

【新着海外雑誌】
(1) 『Appalachia』Vol. 38, No. 3.
(2) 『Der Bergsteiger』Jah. 39, 3-72.
(3) 『La Montagne et alpinisme』Décembre 1971.
(4) 『Mountain』No. 19 January 1971.
(5) 『Österreichischer Alpenverein』Jah. 26, Heft 11/12, Nov/Dec 1971. Jah. 26, Heft 1/2, Jan/Feb 1972.
(6) 『Panorama of Slovakia』1971-6.
(7) 『Rivastemense』Anno 93, N1 Gen 1972.
(8) 『U.I.A.A.』No. 2, Feb. 1972.

会務報告

昭和四十七年度 通常会員総会

昭和四十七年度通常会員総会は四月二十二日午後三時から向井ビル四階会議室で開催した。

△開会の辞(林和夫)
△会長あいさつ(三田会長)

議案
(一) 昭和四十六年度事業報告並びに支部報告
(二) 事業報告書別項のとおり承認。
・各支部報告(出席者のみ)
秋田(柴田、富山(中田)、岩手(笠原)、関西(今西)、越後(藤島)、静岡(山本)、山梨(山村)の各支部報告、文書によるもの東海、北海道支部。

(三) 昭和四十六年度収支決算報告(別項)
(四) 昭和四十六年度財産目録報告(別項)
(五) 以上山崎常務理事
(六) 監事による監査報告(今井監事)
以上三件承認。
昭和四十七年度役員選任の件
(六) 評議員改選の件
四十七年度役員及び評議員として次の諸氏を選任した。

(理事) 三田幸夫、成瀬岩雄、吉沢一郎、中屋健次、神原達、松永敏郎、大森薫雄、宮下秀樹、中島寛、坂下心一、丹部節雄、神崎忠男、板倉勝正(以上再任)、林和夫、伊倉剛三、松丸秀夫、近藤信行、広谷光一郎、須田紀子、堀山毅(以上新任)
(監事) 今井雄一(再任、任期二年)
(評議員) 島田興、佐藤雅夫、望月達夫、織内信彦、村山雅美、金坂一郎、藤島玄、今西寿雄、中田勇吉、高山忠四郎(以上再任、任期三年) 伊藤

秀五郎(新任、任期三年)

(以上二件藤井常務理事)

(出昭昭和四十七年度事業計画案)

(出昭昭和四十七年度収支予算案)

(出昭昭和四十七年度収支予算案)

(出昭昭和四十七年度収支予算案)

(出昭昭和四十七年度収支予算案)

(出昭昭和四十七年度収支予算案)

(出昭昭和四十七年度収支予算案)

(出昭昭和四十七年度収支予算案)

(出昭昭和四十七年度収支予算案)

(出昭昭和四十七年度収支予算案)

(出昭昭和四十七年度収支予算案)

(出昭昭和四十七年度収支予算案)

(出昭昭和四十七年度収支予算案)

(出昭昭和四十七年度収支予算案)

(出昭昭和四十七年度収支予算案)

(出昭昭和四十七年度収支予算案)

(出昭昭和四十七年度収支予算案)

(出昭昭和四十七年度収支予算案)

(出昭昭和四十七年度収支予算案)

(出昭昭和四十七年度収支予算案)

(出昭昭和四十七年度収支予算案)

(出昭昭和四十七年度収支予算案)

(出昭昭和四十七年度収支予算案)

(出昭昭和四十七年度収支予算案)

(出昭昭和四十七年度収支予算案)

(出昭昭和四十七年度収支予算案)

(出昭昭和四十七年度収支予算案)

(出昭昭和四十七年度収支予算案)

(出昭昭和四十七年度収支予算案)

(出昭昭和四十七年度収支予算案)

数は二〇八名、復活会員二名あったが除籍、退会、物故者が九名あった。四十六年度の物故者は一六名あり、昨年十二月の年次晩餐会以後なくなつた方は村井栄一、佐藤隆太郎、岡整徳之助、河内清、木津清一の五氏である。ここに謹んでご冥福を祈りたい。

ルーム来室者は四十六年度延べ四、九六六名ありルームが多くの会員に利用されている。

本年度の事業としては、高地、山岳研究、所の建設で、すでに環境庁の許可内示があり、また日本自転車振興会から四百四十万円の補助金が交付されることも決定、五月から本格的に準備を進め、年内完成を目標にしている。これにともない会員募金も積極的に行ないたい。あらためてお願いするが、この席を借りてご協力をお願いしておく。次は申しにくいことであるが、会費値上げについてもこの席でお願い申し上げておかねばならない。四十七年度はとにかく会費百パーセント徴収を目的としてやりくりして行くつもりだが、ことに郵送料の値上げは大きな問題で四十八年度はどうしても値上げしなければやって行けないと考えている。この件は秋に臨時総会を開いて正式にとりあげたいが、会の財政の健全化の上からもよろしくご理解いただきたい。

また現在この向井ビルのルームが来年度五月いっぱいで立退いてほしい旨申し出を受けている。これも大問題であり、いづれにせよ昨年度に引き続きよき伝統を受けたクラブ・ライフの充実を目的に本年度もやって行きたい。

昭和四十六年度事業報告
一、登山の指導奨励に必要な集会、講習会および展覧会の開催

(イ) 集会

四月二十四日 深田久弥氏追悼会 (OAG会館)

四月二十五日 全国支部長会議 (本会)

五月十五日 第九回木暮祭 (金山平)

五月二十二、二十三、二十四日 第二回現地支部長会議と記念山行 (栗駒山)

六月二日 第二百七十回小集会「静岡大ニールン・ヒマール隊報告」講師 山本良三氏 (本会)

六月五、六日 第二十五回ウェストン祭 (上高地)

六月十二日 第十四回有志閑談会 (六義園)

六月十五日 第二百七十一回小集会「スケッチ教室」講師山里寿男氏 (本会)

七月一日 第二百七十二回小集会「エベレスト国際隊帰国報告会」講師植村直己、伊藤礼造氏 (九段会館)

七月十五日 第二百七十三回小集会「第二回スケッチ教室」講師山里寿男氏 (本会)

七月二十七日 第二百七十四回小集会「マナスル西壁登頂報告会」講師高橋昭氏 (本会)

八月十四、十五日 第二百七十五回現地小集会 (数馬)

九月一日 アクスト氏を囲む会 (本会)

九月六日 マナスル隊交歓会 (本会)

九月十五日 第二百七十六回現地小集会 (川乗山)

十月十五日 第二百七十七回小集会「ヒマラヤ登山に関する実務」講師丹部節雄氏 (本会)

十月二十三日 第四回図書交換即売会 (本会)

十一月十三、十四日 もみじ会 (本会)

十一月十五日 第二百七十八回小集
会「山の唄教室」講師西丸震哉氏
(本会)

十二月四日 昭和四十六年度次晚餐
会 (マツヤサロ) (本会)

十二月十一日 青年懇談会発会式
(マツヤサロ) (本会)

十二月十五日 第二百七十九回小集
会「忘年懇親会」 (本会)

一月十五日、十六日 第二百八十回現
地小集 (八方尾根) (本会)

二月十五日 第二百八十一回小集
会「エベレスト・トレッキング」講師川
喜田壮太郎氏 (本会)

二月二十四日 「山岳図書を語る夕
べ」藤島敏男を囲む会 (本会)

三月十五日 第二百八十二回小集
会「エベレスト・スライド」講師D・P
・デビス、高橋照、新島義昭氏 (本会)

(ロ) 講習会、講演会
十一月十三日 富士登山机上講習会
(本会)

十一月二十一日、二十二日、二十三日
第十二回冬山技術講習会 (富士山)
一月三日 日韓合同高所医学ゼミナ
ル (ソウル) (本会)

(ハ) 展覧会
十二月四日 「この一本展」
(マツヤサロ) (本会)

二、登山施設改善の促進、その他登
山のための適切な事業
上高地山岳研究所の増改築を目下促
進中で四十七年度完成を予定している
三、山岳遭難の予防とその対策に関
する企画および指導
七月八日 富士山頂に診療所を開設
四、自然保護活動の推進
自然保護委員会を設け、国立公園内
における山岳地の自然保護運動に協力
五、海外登山の企画および指導
(イ) 四一六月 エベレスト南壁国際

隊に植村直己、伊藤礼造両隊員を派遣
(ロ) 十月 台湾山岳会の招待で三田
会長ら十三名玉登山登山
会、機関誌「山岳」などの発行
(イ) 「山岳」六十五年を十月発行
(ロ) 会報「山」三百三十一、三百三十二
号の十二回発行
(ハ) 「山日記」一九七二年度版 (三
十七輯) を十一月一日発行
七、目的を同じくする外国の団体と
の情報交換
(イ) 三ツカ国六十五団体と情報交換
を交換した。
(ロ) 台湾山岳会創立二十五周年大会
に小味海外委員が本会を代表して出席
八、その他
七月 「山岳」二十六年から六十年
までの索引発行
十一月 一九七一年度賞状名簿発行
一月 「山岳」創刊号を覆刻出版
三月 一九七〇年エベレスト登山隊
報告書発行

昭和四十七年度事業計画
一、登山の指導奨励に必要な集
研究会、講習会等の開催
(イ) 集
小集 (報告、講習会) 本会 年
間十回
第二十六回ウェストン祭 上高地
(六月三、四日)
・有志懇談会 六義園 (六月十日)
・支部長会議 本会 (四月、十二月)
・現地支部長会議兼現地小集 秋
田 (六月十六、十七、十八日)
・年次晚餐会 (十二月二日)
・来日外国登山家との交歓 (随時)
(ロ) 研究会
・高所登山技術研究会 (未定)
・雪崩研究会 (十月)
(ハ) 講習会
・登山技術講習会 (十一月)

・岩登講習会 (未定)
(二)
この一本展 (十二月二日)
二、登山施設の改善の促進、その他
登山のための適切な事業
・上高地山岳研究所の増改築を行な
い十一月下旬完成を目標とする。
三、山岳遭難の予防とその対策に関
する企画および指導
・富士山頂に夏山診療所を開設
(七月一八月)
・各大学医学部山岳部による夏山診
療所に対する援助 (七月一八月)
四、自然保護活動の推進
・自然保護委員会を国立公園内にお
ける自然保護運動に協力
五、海外登山の企画および指導
・とくにヒマラヤにおける無事故登
山を目的に会員へ適切な指導を行な
う
六、機関誌などの刊行
・「山岳」六十六年の発行 (七月)
・会報「山」十二回発行 (月刊)
・「山岳」覆刻版発行 (年三冊)
・山岳図書交換会 (十月)
・「山日記」昭和四十八年度版発行
(十一月)
・日本アルプス紹介英文パンフレッ
ト発行
・JAC紹介英文パンフレット発行
七、目的を同じくする国内および国
外団体との連絡、情報の交換
・海外委員会を設け、世界の登山団
体と連絡をとり、情報の交換ならびに
機関誌の交換を行なう。
八、その他、目的を達成するための
必要な事業を行なう。

四月支部長会議
昭和四十七年度四月支部長会議は四
月二十一日午後六時から有楽町ニ
ューキョー成漢クラブで開かれた。

三田会長あいさつのあと懇談形式で
話が進められ出席の各支部長より支部
の現状報告や行事予定などの簡単な説
明や会への希望がのべられた。六月の
現地支部長会議兼現地小集の案内、
自然保護運動の推進、支部還元金の問
題、アンナフルナリ偵察新聞報道の件、
日山協海外登山推せん状発行基準設定
の件などにつき質疑応答あり。静岡支
部からは本部、支部とはいいたいよう
あるべきかの提案があり、本件をめぐ
って越後、関西をはじめ各支部が活発
な意見を交換し午後八時半閉会した。
▽出席者 岩手 (笠原、秋田 (柴田)
山形 (後藤、越後 (藤島、静岡 (山
本)、山梨 (山本支部長代理)、富山 (中
田)、東海 (熊沢、信濃 (塚本)、関西
(今西) 各支部長、三田会長、成瀬、
吉沢副会長、藤井、山崎、宮下各常務
理事、板倉、坂下理事、加藤、折井評
議員、伊倉剛三

四月理事評議員会
(十四日午後六時半本会ルーム)
▽出席者 三田会長、成瀬、吉沢副
会長、中屋、山崎、藤井、丹部、宮下
神原、野上、坂下、中島各理事、織内、
加藤、金坂、佐藤、津田各評議員、山
下、今井監事、林、山口委員
▽議事
・上高地山岳研究所の件
(山崎、中屋)
自転車振興会から四月五日四百四十
万円の補助金交付内定通知があった。
本会としては至急一件書類をととのえ
交付金を受領する手続を取りたい。ま
たそれと平行して募金委員会を設け、
会員を中心とした募金に取りかかりたい。
山岳研究所は年内完成を目的とし
従来の山荘委員会を山岳研究所建設委
員会として次回理事会においてメンバ
ーを強化し建設事業を進めたい。この
件了承。

昭和四十七年度収支決算について説
明あり、これを承認、四月十八日会計
監査を受ける。
なお総会通知で理事候補として山口
節子氏をあげたが、同氏が一身上の都
合で辞退されたため、須田紀子氏をお
すことにしたい。この件了承。
▽報告
・佐々木光子氏辞任の件 (山崎)
本会経理担当職員佐々木光子氏は一
身上の都合で五月末退職されること
になった。後任者を求めているので、心
当りのある方は本会事務局まで連絡し
てもらいたい。
・山岳六十六年の件 (中島)
山岳六十六年は八千m峰特集として
現在編集を進めている。六月ごろには
発行したい。

五月理事評議員会
(五月十二日六時半本会ルーム)
▽出席者 成瀬、吉沢副会長、中屋、
神原、松永、宮下、坂下、神崎、板倉、
林、伊倉、松丸、近藤、須田、広谷、
山崎各理事、今井、山下各監事、津田、
島田、加藤、小原、佐藤、織内、村山、
渡辺 (氏)、金坂各評議員、(委任出席)
中島、丹部、大森各理事、望月、中田、
高山各評議員
▽議事
・上高地山岳研究所の件 (林)
文化庁、環境庁から正式認可があり、
山岳研究所建設準備委員会を開いて準
備を進めている。七月には着工し十月
いっしょに完成を予定している。自転車
振興会からの補助金内定額は四百四十
万円、会員からの募金を五百万円と予
定している。募金については、委員会
で案を作った六月月中旬からスタートし
たい (この件了承)。

四月支部長会議
昭和四十七年度四月支部長会議は四
月二十一日午後六時から有楽町ニ
ューキョー成漢クラブで開かれた。

三田会長あいさつのあと懇談形式で
話が進められ出席の各支部長より支部
の現状報告や行事予定などの簡単な説
明や会への希望がのべられた。六月の
現地支部長会議兼現地小集の案内、
自然保護運動の推進、支部還元金の問
題、アンナフルナリ偵察新聞報道の件、
日山協海外登山推せん状発行基準設定
の件などにつき質疑応答あり。静岡支
部からは本部、支部とはいいたいよう
あるべきかの提案があり、本件をめぐ
って越後、関西をはじめ各支部が活発
な意見を交換し午後八時半閉会した。
▽出席者 岩手 (笠原、秋田 (柴田)
山形 (後藤、越後 (藤島、静岡 (山
本)、山梨 (山本支部長代理)、富山 (中
田)、東海 (熊沢、信濃 (塚本)、関西
(今西) 各支部長、三田会長、成瀬、
吉沢副会長、藤井、山崎、宮下各常務
理事、板倉、坂下理事、加藤、折井評
議員、伊倉剛三

四月理事評議員会
(十四日午後六時半本会ルーム)
▽出席者 三田会長、成瀬、吉沢副
会長、中屋、山崎、藤井、丹部、宮下
神原、野上、坂下、中島各理事、織内、
加藤、金坂、佐藤、津田各評議員、山
下、今井監事、林、山口委員
▽議事
・上高地山岳研究所の件
(山崎、中屋)
自転車振興会から四月五日四百四十
万円の補助金交付内定通知があった。
本会としては至急一件書類をととのえ
交付金を受領する手続を取りたい。ま
たそれと平行して募金委員会を設け、
会員を中心とした募金に取りかかりたい。
山岳研究所は年内完成を目的とし
従来の山荘委員会を山岳研究所建設委
員会として次回理事会においてメンバ
ーを強化し建設事業を進めたい。この
件了承。

・経理規定、旅費規定の件 (中屋)
従来明確な経理規定がなかったので
明文化した。また旅費規定については
昭和四十四年四月一日施行されたものを
一部改正した。原案をなお検討して
常務理事会に一任することです。
・事務局佐々木光子氏退職による新
任者採用の件 (林)
・後任者推薦方を依頼していた
が三名の応募があり、会員杉山孝氏の
妹杉山都子氏 (世田谷区北鳥山六
二二一〇) を採用することにした。
(この件了承)

・ルーム賃貸借契約更新の件 (中屋)
今年五月三十一日限りで向井組との
契約がされるので、その更新について
交渉をすすめていたが、明年五月末ま
で延長することで明渡しを要求してき
た。当ルームは交通の便も良く、会員
にもかなり知られてきたことでもあり
移転することになると諸経費もかさむ
ので、検討の結果、加藤評議員に再交
渉してもらうことと了承した。

・常務理事互選の件 (中屋)
常務理事は中屋、林、伊倉、宮下、
中島、坂下、板倉と決定。
・四十七年度理事会務分担の件 (中屋)
中屋 (総務、財務) 林 (山研、総務)
伊倉 (総務、財務、支部) 宮下 (青年
懇談会、高所登山研究会、指導、総務)
中島 (山岳) 坂下 (会報) 板倉 (支部、
自然保護) 松丸 (山日記) 神原 (海外
連絡) 近藤 (図書、書評) 松永 (指導)
広谷 (遭難対策) 大森 (医療) 須田 (婦
人懇談会) 丹部 (日山協、海外連絡、
都岳連) 神崎 (集会、青年懇談会) 婦
山 (青年懇談会)

・常任評議員互選の件 (中屋)
常任評議員として島田、加藤、小原、
織内、村山、渡辺、金坂と決定。
▽報告事項

・北里大学よりネパール国カンジロ
パ・ヒマールへ登山隊を派遣したいの
で推薦状を交付して欲しいと依頼があ
り、都岳連に交付方を出願した。(中屋)

・都岳連担当を山崎安治氏辞任によ
り、丹部理事を推薦した。(中屋)
・UIAA総会の件
今年度は八月二十九日～九月三日、
スイスのモントルーで開催されること
になり佐藤テル、神原達氏の二名が出
席することにした。(神原)

・山岳 (第一号第二号) 覆刻版が今
月末に刊行される。部数は三百部、現
在約百名の予約申込みがある。(近藤)
・名誉会員岩永信雄氏より蔵書寄贈
の申し出があり、近日中に訪問するこ
とにした。(近藤)
・ウェストン祭が六月三、四日と決
まり本会から伊倉理事が出席、例年通
り一万円を信濃支部へ助成することに
した。(中屋)
▽その他

・有志関係会は六月十日に六義園で
新旧役員懇親会を六月二十日に開催
(幹事神崎理事)、青森県岳連指導員研
修会出席報告、富山支部総会出席報告
が吉沢副会長、中屋、板倉、松永各理
事からそれぞれ報告があった。
・次回常務理事会は五月十九日午後
六時三十分より、六月理事評議員会は
六月九日午後六時三十分より開催。

ルーム日誌 (47年4月)
3日 (月) 桜門山岳会
5日 (水) 自然保護委員会
婦人懇談会
6日 (木) 学生部
7日 (金) 常務理事会
山岳研究所建設委員会
8日 (土) 学生部
11日 (火) 学生部

12日 (水) 図書委員会
13日 (木) 全日本学生山岳連盟委員会
14日 (金) 理事評議員会
青年懇談会
15日 (土) 学生部
20日 (木) 青年懇談会
21日 (金) 全日本学生山岳連盟委員会
22日 (土) 昭和四十七年度通常総会
会

24日 (月) 桜門山岳会
25日 (火) 書評委員会
26日 (水) 山岳研究所建設委員会
四月中来室者 四九一名
終身会員 (47年4月)
一八四六 織内信彦
一六四一 佐藤テル
一八三五 山崎安治
物故会員
五七七七 真田昌孝 昭和四七・四・
一逝去
会員名簿訂正
六三頁下一行一〇三二入会年月二
七・六 電話 (〇三) 四一四一三八
五一

一〇三頁上七行三九八〇 電話 (〇八
八) 二二一九六〇
事務局よりお願い
一、住所を変更された方は早目にお
届け下さい。最近会報の返送がふえて
います。
二、会宛送金される場合は〇〇年度
分会費、〇〇報告書代〇〇円、同送料
〇〇円のごとくかならず送金内訳をお
書き添え願います。

「山岳」第六十六年予告
「山岳」六十六年は原稿の都合で発行
が遅れておりますが、目下印刷にまわ
っており、七月初旬には出来あがる予
定です。残りわずかとになりましたの
で、主な内容は次のとおりです。
進蔵日誌 (下) 成田安輝

エベレスト一九七〇年 大塚博美
マカール登頂 (一九七〇年)
ダウラギリ登頂 (一九七〇年) 原真・浅見正夫
川田哲二
P29登頂 (一九七〇年秋) 住吉仙也
チニレン・ヒマール登頂 (一九七
〇年秋) 山本良三
ダウラギリVI登頂一九七〇年 野村哲也
アンナブルナIII登頂一九七〇年
コー・イ・パガール一九七〇年 一瀬義典
コー・イ・パガール一九七〇年 中瀬司
コー・イ・パガール一九七〇年 松下征文
サラグラール峰周辺の山座同定 宮森常雄
ネパールの散歩道 神原達
他に追悼、図書紹介、会務報告、英
文梗概。

春の叙勲
今西錦司氏 (会員番号一一一七
番) は天皇誕生日の去る四月二十
九日付勲二等瑞宝章を受章され
た。
小池新二氏 (会員番号一七一〇
番) は四月二十九日付勲二等瑞宝
章を受章された。
吉田久兵衛氏 (会員番号八二六
番) は四月二十九日付木杯一組を
受章された。

『山岳』第一年第二号
覆刻版発売中
頒価千八百円、ただし郵送の場合は
送料手数料込みで二百円を別途いた
します。残りわずかとなりましたので
希望者は代金を送って至急ルームへお
申し込み下さい。

ビールパーティーのお知らせ
本年も左記の要領で恒例のビールパ
ーティーを開催いたしますので多数ご
参加下さい。
・日時 七月二十二日 (土) 午後四時
・場所 本会ルーム
・会費 軽食おつまみ付ビール券五百
円 同じくジュース券三百円
・申込方法 ルームに電話あるいは手
紙でお申し込み下さい。
婦人懇談会

東海支部移転通知
名古屋市中区錦三二四二 三徳
ビル五階アルプス内電話九六二一四八
一五

訂正 会報「山」第三二二二号三月理
事評議員会議事録、秩父宮学術記念賞の
件、中「松本徹章寄贈のエベレスト・メ
ダル」とあるのは、松本徹章寄贈では
なく、製作されたものですので訂正、
お詫びいたします。

あとがき 本会がマナスルやエベ
レストに隊を送り多忙を極めた当時、
会務を抱え会報発行に専念された山崎
安治さん、永い間ご苦労さまでした。
このたび吉沢一郎副会長長夫人が五月
二十六日東京女子医科大学第二病院で
急逝された。ご逝去を悼み謹んでお悔
み申し上げます。(坂下)

昭和四十七年六月十日発行
東京都千代田区神田錦町
三二二三 向井ビル
発行所 法人 日本山岳会
編集代表 坂下 心一
(233) 七四四一
振替口座東京四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所 株式会社 技報堂

ミュンヘン
・ユース・
キャンプ参
加募集

ドイツ山岳
会では、本年
八月二十六日
と九月十日に
開催されるミ
ュンヘン・オ
リンピックに
際し世界各国
から四百名の
青年を招きキ
ャンプを開
く。オリンピ
ック競技も参
観できるが旅
費と私的な費
用は各人の負
担、滞在費は
ドイツ山岳会
が持つ。ただ
し各人参加費
として二百マ
ルク支払うこ
と。各国の参
加者は五名程
度とし、それ
ぞれ民族舞踊
なり音楽を披
露すること。
今のところ参
加希望者が一
人だけ、希望
者は海外連絡
委員会に至急
お申し込み下
さい。



茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

ブータン感傷旅行

小方全弘著

〈菊判280頁〉定価980円

森林・草原・氷河

加藤泰安著

〈A5判482頁〉定価1,500円

すこし昔の話

初見一雄著

〈四六判400頁〉定価1,200円

遠い山・近い山

望月達夫著

〈B6判334頁〉定価960円

山の古典と共に

大島堅造著

〈四六判280頁〉定価1,500円

雪山・葎山

川崎精雄著

〈A5変型判340頁〉定価1,200円

雪原の足あと

坂本直行著

〈B5判206頁〉定価2,800円

シブトンの自叙伝

未踏の山河

大賀二郎・倉知敬訳

〈A5判440頁〉定価1,900円

山日記1972年版

日本山岳会編

〈A6判368頁〉定価750円

山 岳

日本山岳会編

〈A5判〉

総索引	1,000円
65年	2,000円
64年	2,000円
63年	2,200円
62年	2,000円
61年	1,800円

国立公園カレンダー

国立公園協会編

〈A5判リング綴り〉定価960円

屋久島・美しい豊かな自然

赤星 昌編

〈B6判202頁〉定価480円

山で唄う歌1集・2集

戸野昭・朝倉宏編

〈A6判126頁〉1集240円・2集280円

日高山脈

北大山の会編

〈菊判362判頁〉定価2,200円

山に忘れたパイプ

藤島敏男著

〈菊判584頁〉定価2,500円

日本の山旅

足立源一郎スケッチ帖

〈A変型208頁〉定価3,600円

アンナプルナ日記

京都大学学士山岳会編

〈A12取変型判170頁〉定価1,200円

登頂ゴジュンバ・カン

高橋 進編

〈A5判350頁〉定価900円

キンヤンキッシュ1965

東京大学カラコルム遠征隊編

〈B5変型判220頁〉定価3,000円

登山・スキー用具専門店

●買いやすい

山の店

山の店

●北へ来たら

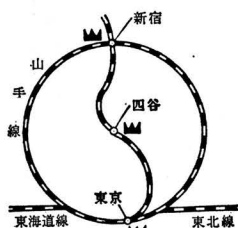
山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101

TEL. 06(362)5736

●フレッシュな

山の店



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地

TEL (351) 7432-1912

八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五

TEL (271) 1560-8575

新宿店 新宿ステーションビル四階

サービスショップ

TEL (352) 65664

日本信販加盟店



山友社 たかはこ

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9

片桐 盛之助

電話 東京(831) 1794・6680番

なるべくなんにも
持たない方がいい
けれども、どうも
要するものがある。
なにしろ人間ですから
そして登山ですから
どうしても必要なもの
をこころえてみる
主責任はもっています

かたるべシンティ
でんや 281-8456
中央区八重洲4-01

秀山荘

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1

PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘

東京都中央区銀座 2-4-5 (561)3600・(567)9031
 東京都中央区銀座 2-4-4 (561)0966 スキー店
 大塚店 北区豊島町上 1丁目4-7 (364) 0933 (代)
 福岡店 東 区 博 多 1-4 28) 34440

